１．平城宮跡の概況

（１）平城宮跡の歴史的背景

・ 平城京は 708 年の平城遷都の詔を契機として、710 年元明天皇が藤原京より遷都した都である。東西約 4.3km、南北約 4.8km の長方形の東側に東西約 1.6km、南北約 2.4km の張り出し部である外京を加えた区域とされる。途中紫香楽宮や難波京などに都を移したこともあるが、784 年に長岡京に遷都されるまでの 74 年間は平城京を中心として律令国家の完成や天平文化の確立など古代国家として本格的な基盤が形成され、奈良時代の政治や文化が展開した。
・ 奈良時代には現在確認されている最古の歴史書である「日本書紀」、「古事記」や「万葉集」、「風土記」などの作品・記録が文字による記録として編纂された。これまで暗唱によって伝えられてきた国の歴史などが「文字による記録」として残されたのは奈良時代以降とされており、このことから、奈良時代を「日本の歴史の始まり」とすることがある。
・ 中国・朝鮮半島を経由して日本に流入したオリエントの文化・芸術・技術は、経由したシルクロードの様々な国際性をさらに融合させ、奈良時代の日本において天平文化を生み出した。
・ 古事記において「やまとはくにのまほろば」と詠まれているが、その「やまと」に置かれたとされる飛鳥・藤原・平城の都の中でも平城京は政治・外交・文化等の面で完成期に位置づけられる。
・ 平城京は大陸から迎える使節や国内の地方豪族に対して威厳・権威を示すために唐の長安に倣って条里制や風水を取り入れ、本格的な中国様式の都城として造営された。その景観は万葉集においても「あおによし奈良の都」と詠まれた。
・ 平城宮は平城京の中央北端部に位置する東西・南北ともに約 1km の正方形に東西 250m、南北 750m の張り出し部を加えた区域とされ、天皇の住まいである内裏、天皇の儀礼や朝見が行われる大極殿、儀式を行う朝堂院、政治を行う官衙や朱雀門をはじめとした 12 の門が置かれ、都の中心であった。

※ 参考

倭(やまと)は　国のまほろば　たたなづく青垣　山隠(やまごも)れる　倭(やまと)しうるはし

古事記　倭建命（やまとたけるのみこと）

あおによし　奈良の都は咲く花の　にほふがごとく　今さかりなり

万葉集　巻第三・三二八　小野　老　（おののおゆ）

（２）平城宮跡の保存と活用

- 平安時代、平城上皇が平城京へ都を戻そうとしたが、実現には至らず、その後現在に至るまで耕作地や住居などに使用されてきた。
- 江戸時代末の北浦定政の研究を元に、明治期末に関野貞、嘉田貞吉による測量や遺跡調査が行われ、これらの結果が引き金となって棚田嘉十郎、溝辺文四郎らの地元民間有志が保存活動を行った。
- これらの研究や保存活動を契機として、平城宮跡は大正 11 年に史跡に指定され、その後昭和 27 年に特別史跡に指定された。併せて、土地の国有化がなされ、現在では特別史跡内の 80%程度が国有地となっている。また、発掘調査・研究、その成果を活かした建物等復元、遺構表示等の整備が継続的に進められている。
- 平城宮跡及びその周辺は歴史的風土特別保存地区、風致地区などに指定されており、重層的に法的な保全が図られている。
- また、平成 10 年には「古都奈良の文化財」の構成資産の一つとして、ユネスコの世界遺産に登録されている。
- 昭和 53 年に作成された「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想（遺跡博物館構想）」に基づいて、主要な遺跡の一部は平城宮跡内の発掘調査・研究成果に基づいて、建物等復元、遺構表示など往時の状況の理解に資する様々な「遺跡の表現」がなされ、研究資料館的に活用されている。
- そのうち、朱雀門、東院庭園、第一次大極殿などの建物等復元が行われたものや平城宮跡資料館、遺構展示館などについては、観光スポットとして多くの人々が訪れている。
- 歴史的な背景や保存活動の成果により、奈良時代の様子を今に伝える様々な遺構・遺物が広大な平城宮跡の地下に良好な状況で保存されている。

（３）平城宮跡の立地

- 平城宮跡は近畿地方のほぼ中央にある奈良県奈良市に存在し、京都・大阪まで 40km 圏内に位置している。
- 平城宮跡では東西方向では宮跡内の南部を近鉄奈良線が、また、北部を一般県道谷田奈良線が横断し、南北方向では中央部を市道大極線（みやと通り）が縦断している。
- 自動車交通においては、近辺の道路網によって京都・大阪・名古屋のいずれの方向に対しても良好なアクセスを持つ。一方、平城宮跡付近の道路では渋滞が問題となっている。
- 鉄道交通においては、平城宮跡付近に近鉄大和西大寺駅・新大宮駅の 2 駅があり、徒歩 10～20 分程度の距離にある。

・ 平城宮跡の区域は商業地区である大和西大寺とオフィス地区である新大宮の中央部にある。

（４）平城宮跡の自然的環境

・ 平城京は全体的に平坦な地形で、風水に基づいて「四禽図に叶う」地に造営されたとされるが、現在においても、その周辺の春日山、平城山、数多くの陵墓などによって緑豊かな自然的環境が保存されており、古都奈良の良好な歴史的・文化的景観を形成している。これにより、平城宮跡は内に往時の宮跡の威容を偲び、外に古都奈良を思うことができる古都奈良の中心的な存在となっており、世界遺産「古都奈良の文化財」の一つとして高く評価されている。
・ 平城宮跡には自然植生は少ないが、池沼、湿地、草地、樹林地等多様な自然的環境が存在する。このような環境の中に数多くの種類の野鳥・昆虫等が生息しており、奈良市の貴重な緑のオープンスペースとして、散策、自然観察などのレクリエーションに活用されている。

（５）平城宮跡の利用状況

・ 平城宮跡資料館・遺構展示館・東院庭園に年間約 15 万人が来訪している。
・ 市街地にかこまれた広大なオープンスペースとして歴史体験や観光の他、地域住民の日常的な多目的利用の場として幅広く活用されており、通勤・通学による通過利用を含め、年間約 100 万人が利用している。
・ 平城宮跡資料館・遺構展示館・東院庭園・朱雀門等の主要施設においては観光ボランティアガイドが常駐し、無料で案内や解説を行っている。
・ 奈良市地域防災計画において広域避難地（指定面積約 75ha）とされており、地域住民にとって不可欠である多目的な都市緑地としての位置付けも有する。
・ 一方、便益施設等は不足した状態にあり、来園者からは、「便益施設」「休養施設」「サービス施設」等の整備に対するニーズが高い。